

天空を通う旅人、マタイーロレンスの宇宙観

古 我 正 和

I

D.H.ロレンス (David Herbert Lawrence, 1885-1930) にはその晩年の作品『死んだ男』(*The Man Who Died*, 1931) でも分かるように、キリスト教の在り方に批判的な考えが強くあった。しかし彼の詩には地上の世俗を大切にしようという気持ちと同時に、神に対する敬虔な気持ちが見られる。詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923) には、新約聖書の4福音書の筆記者の名を持つ詩が収められているが、本稿ではその中の「聖マタイ」('St Matthew') をとりあげ、ロレンスのキリスト教に対する考えを考察したいと思う。

この詩集はロレンスがメキシコに滞在していた1923年10月に Seltzer 社から出版された。そして「聖マタイ」の詩は同年の4月に *Poetry* 誌に、また10月には 'Cypresses' や 'Spirits Summoned West' と共に *Adelphi* 誌に掲載されている¹⁾。

四つの福音書の筆記者は、それぞれ翼を持った天使、ライオン、雄牛、鷲に表象され、天国の4隅に座を占めるとされる²⁾。その四つの表象からこの詩は始まる。

They are not all beasts.

One is a man, for example, and one is a bird.

I, Matthew, am a man.³⁾

詩の中で私という聖マタイは、上の4つの存在のうちの天使であり、ここでは a man と述べて、ここでマタイは人間宣言をおこなう。先に述べた小説『死んだ男』に登場する人物と似た立場ではあるが、ここでは神としてのキリストと俗人である自分との区別を、はっきりしようという意図が見られる。そして『ヨハネによる福音書』12章32節でイエスが十字架に架けられる前に言った

“And I, if I be lifted up, will draw all men unto me”—⁴⁾

という言葉を引きいて、人間でなく「人の子」(Son of Man)としてのイエスが自分で上のように言うのは、神と俗人との区別を無視した無責任 (remorseless) な言葉だと、次のように歌う。

That is Jesus.

But then Jesus was not quite a man.

He was the Son of Man

Filius Meus, O remorseless logic

Out of His own mouth.⁵⁾

Filius Meus (わが子) とは大文字になっていることでも分かるように、神であるキリストへの言葉である。人間を皆天上へ引き上げ、後でマタイが言っているように、下へ降ろして布教活動をさせることがないのは、無責任だということである。そしてマタイは改めて次のように言う。

I, Matthew, being a man

Cannot be lifted up, the Paraclete

To draw all men unto me,

Seeing I am on a par with all men.⁶⁾

私マタイは人間ですべての人々と同じなのだから、引き上げられて唱道者となり、すべての人々を私のもとへ引き寄せることはありえないという。ここにはキリストのように神ではなく、神と人間の間を往復して使者としての役割を演じようという決意が表れている。しかしここでマタイは二つの心情に引き裂かれる。一つは上で述べた両者の使者となること、もう一つは神に選ばれて唱道者となり、キリストと同様の域に達することへの憧れである。これは次のように歌われる。

I, on the other hand,
Am drawn to the Uplifted, as all men are drawn,
To the Son of Man
*Filius Meus.*⁷⁾

次の部分には、世俗の人間としてのマタイが「人の子」としての神に、天上へと引き上げ（lift up）られる時の胸のときめき、その喜びが表れている。一人間に過ぎないマタイは、獣と同じ心臓が鼓動し（my heart beats）、黒い血は体の端から端まで巡る（throws the dark blood from side to side）のである。「黒い血」の中に、ロレンスの詩や他の作品に共通する原初への方向、人間の世俗の在り方が見られる。

Wilt thou lift up, Son of Man?
How my heart beats!
I am man.

I am man, and therefore my heart beats, and throws the dark blood
from side to side
All the time I am lifted up.
Yes, even during my uplifting.⁸⁾

そしてこの「心のときめき」や2行下の「心臓の鼓動」、「黒い血の巡り」こそは人間マタイの象徴であり、先に述べたマタイが引き裂かれた二つの立場の分かれ目となるものである。もし引き上げられる途中で心臓が打つのを止め、黒い血が巡るのを止めれば、今のようにもはやマタイは人間でなくなるという⁹⁾。そしてその後次のようになるという。

I might be a soul in bliss, an angel, approximating to the Uplifted;
But that is another matter;
I am Matthew, the man,
And I am not that other angelic matter.¹⁰⁾

マタイは引き上げられた後、祝福された魂、天使 (soul in bliss, an angel) となり、引き上げられた者に近づく (approximating to the Uplifted) かも知れないという。しかし自分はあくまでも人間マタイであり、そのような「自分とは別の天使のような存在」(other angelic matter) ではないと強調するのである。これは『死んだ男』に見られる、男の地上への帰還宣言に似ている。

II

ここからマタイの世俗への方が強くなる。マタイにはやはり第一の憧れ、つまり聖人となって天上に留まっていたいという気持ちのままでいる訳にはいかない。心臓がいったん打つのを止めれば二度と地上へ帰還することはできない。そこで次のように歌う。

So I will be lifted up, Saviour,
But put me down again in time, Master,
Before my heart stops beating, and I become what I am not.
Put me down again on the earth, Jesus, on the brown soil

Where flowers sprout in the acrid humus, and fade into humus again.
Where beasts drop their unlicked young, and pasture, and drop
 their droppings among the turf.
Where the adder darts horizontal.
Down on the damp, unceasing ground, where my feet belong
And even my heart, Lord, forever, after all uplifting:
The crumbling, damp, fresh land, life horizontal and ceaseless.¹¹⁾

たとえ引き上げられたとしても、心臓が打つのを止め聖化する前に、もう一度自分を地上に下ろして欲しいという。the brown soil (茶色の土)、acrid humus (腐植土)、beasts drop their unlicked young (獣がまだ形の整わないこどもを産み落とし)、drop their droppings among the turf (芝生の間に彼らの落とし物を落とす)、adder darts horizontal (まむしが腹ばいになって押し進んでゆく)などはマタイの憧れるもう一つの理想郷、土臭い現実の俗界にふさわしい地上の世界である。そしてそこにこそマタイは永遠に身も心も根付く。これこそはマタイが望んでいたことである。そして再び、たたみかけるようにして、マタイは次のように言う。

Matthew I am, the man.
And I take the wings of the morning, to Thee, Crucified, Glorified.
But while flowers club their petals at evening
And rabbits make pills among the short grass
And long snakes quickly glide into the dark hole in the wall,
 hearing man approach,
I must be put down, Lord, in the afternoon,
And at evening I must leave off my wings of the spirit
As I leave off my braces, ¹²⁾

上の the wings of the morning (朝の翼) は、Crucified, Glorified (十字架

にかけられ、栄光に包まれた) イエスに向かう時に用いられるものである。しかしすぐさま午後には地上に降ろしてくれと願う。下界に降りた私は、平凡なサラリーマンが勤務先から帰って、ズボン吊りを外すように霊の翼をたたみ (I ... leave off my wings of the spirit / As I leave off my braces)、霊界から俗界へと脱皮する。兎が短い草の間に糞を落とす (rabbits make pills among the short grass) という表現は、世俗の最たるものである。そうしていよいよ神さえも届かぬ所へ向かう。

And I must resume my nakedness like a fish, sinking down the
dark reversion of night
Like a fish seeking the bottom, Jesus,
IXΘΥΣ
Face downwards
Veering slowly
Down between the steep slopes of darkness, fucus-dark,
seaweed-fringed valleys of the waters under the sea,
Over the edge of the soundless cataract
Into the fathomless, bottomless pit
Where my souls falls in the last throes of bottomless convulsion,
and is fallen
Utterly beyond Thee, Dove of the Spirit;
Beyond everything, except itself.¹³⁾

ここから神さえも及ばぬ領域が始まる。私は魚のように裸 (my nakedness like a fish) に戻り、よみがえった暗い夜の中を沈んでいかなければならない。次の「顔を下に向け、ゆっくりと向きを変え、闇の険しい斜面、海藻の闇、海藻の房飾りをつけた海底の谷間の間を下りてゆき、音のない滝のところを越え、測り知れない、底なしの穴の中へ……落ち、最後まで落ちてしまったところへ」こそは、我われがロレンス晩年の小説『死んだ男』に登場する男が達した

境地である。ここにはキリスト教からの脱却、独立があり、全く別の境地がある。まさにキリストさえも達せられず、「自分自身以外には、何ものも届かぬ」(Beyond everything, except itself)境地である。これと同様のことが、下の「そなたでさえ地上の人間の残りかす(the dregs of terrestrial manhood)を飲み干すことはできない」という表現の中にも見られる。皆の者はキリストから後退りしてゆくのである。

But even thou, Son of Man, canst not quaff out the dregs of
terrestrial manhood !
They fall back from Thee.¹⁴⁾

地上の人間の残りかすとは、上で考えたキリスト教からの脱却・独立であり、地上の人間の営みである。その人間の生臭い営みが、下の「水銀の玉」(a dripping of quick-silver)や「血の滴り」(drops of blood)により象徴されている。また上の脱却・独立は、「そなたとは全く逆の暗い天頂」(the dark zenith of Thine antipodes)に表れている。暗い天頂とは、神とは逆の世界であり、そこへ聖マタイは降りていく。

They fall back, and like a dripping of quicksilver taking
the downward track,
Break into drops, burn into drops of blood, and dropping,
dropping take wing
Membraned, blood-vained wings.
On fans of unsuspected tissue, like bats
They thread and thrill and flicker ever downward
To the dark zenith of Thine antipodes
Jesus Uplifted.¹⁵⁾

III

ところでロレンスはこの詩を含む四人の福音書の筆記者たちの詩に先立つ序文の中で、次のような謎めいたことを述べている。

“OH PUT them back, put them back in the four corners of the heavens, where they belong, the Apocalyptic beasts. For with their wings full of stars they rule the night, and man that watches through the night lives four lives, and man that sleeps through the night sleeps four sleeps, the sleep of the lion, the sleep of the bull, the sleep of the man, and the eagle's sleep....”¹⁶⁾

これは『ヨハネの黙示録』の中で述べられている、神の御座の中や周りの四つの動物に関係している。ロレンスはこれらの動物を元に戻せ（put them back）というのである。今まで読んできたところによると、四人の唱道者たちは最初はこの天上には居ず、地上と実質的に同じ天国の神の御座とは全く逆の「暗い天頂」からその御座へ引き上げられたのである。そしてこの「元に戻せ」とは、キリストとは全く逆の暗い天頂へ天国から戻すべしと言っていると考えられる。これが「本来の場所」（where they belong）すなわち地上なのである。地上へ帰還すれば、上で見たように動物は復活し自然はその恵みを回復することになる。このことは、上の序文で述べているように、四動物たちは夜を支配し、夜を見守る人間は四つの生を生き、夜を眠る人間は獅子の眠り、雄牛の眠り、人の眠り、鷲の眠りの四つの眠りを眠ることと一致する。

序文では次いでこの逆を述べる。

“...But when the heavens are empty, empty of the four great Beasts, the four Natures, the four Winds, the four Quarters, then sleep is empty too, man sleeps no more like the lion and the bull, nor wakes from the

light-eyed eagle sleep.”¹⁷⁾

天国に誰も居なくなれば、四つの偉大な「獣」、四つの「自然」、四つの「風」、四つの「方角」がなくなれば、その時眠りもまたなくなり、人間は獅子や雄牛のようにもはや眠らず、眠りが浅い鷲の眠りから覚めることがない、不自然な状態になるというのである。これは今まで見てきた地上への帰還後の状態とは全く逆である。従ってこれは先に述べたように、四人の唱道者を象徴する四つの獣が神の玉座とは全く逆の「暗い天頂」に居る状態だと考えざるを得ないのである。今天国（heavens）の4隅すなわち「逆の暗い天頂」には誰も居ないのでから、世俗の地上を唱道する者がいないために、地上では眠りもなく風も吹かない状態であり、世直しの必要な世の中となつて、ロレンスの世界観と一致する。ちなみにこのことについて Lockwood も次のように述べている。

Lawrence wants the beasts put back where they belong, but that is down on earth, not in the heavens.¹⁸⁾

すなわち、上の「暗い天頂」とは地上のことである。ここで関連づけられるのが、『恋する女たち』（*Women in Love*, 1920）の中に出てくる「星の均衡」の考え¹⁹⁾である。この作品の主人公バーキンとアーシュラが理想と考えた人間の在り方が「星の均衡」だった。今この詩に出てくる「暗い天頂」と考え合waしてみると、みごとに一致が見られる。ロレンスはここでは、天空と地球ではなくもっと巨視的に、全宇宙的に世界を考えていたことが分かるのである。

さてこれで序文と詩の内容との矛盾がなくなったが、さらに読み進もう。ここから聖マタイは神の天国とは逆向きの天頂へ降りてゆく。

Bat-winged heart of man,
Reversed flame
Shuddering a strange way down the bottomless pit
To the great depths of its reversèd zenith.²⁰⁾

こうもりの翼を持った (Bat-winged) 人間は、もはや神の玉座へは昇って行けない。こうもりは神や天国とは縁のない、世俗の象徴として用いられている。またロケットの噴射も逆向き (Reversed) であって、天国とは逆向きに降りてゆく。そしてこれこそが、今みたように四つの獣が本来在るべき場所なのである。そして次のようにこうもりと対照的に用いられているのが雲雀である。

Afterwards, afterwards

Morning comes, and I shake the dews of night from the wings
of my spirit

And mount like a lark, Beloved.²¹⁾

朝には翼をつけて、雲雀のように天上の神の御もとへおもむく。しかしそんな神に愛された (Beloved) 私だけれども、こうもりに出会えばとたんに天国から離れてしまうと、次のように歌う。

But remember, Saviour,

That my heart which like a lark at heaven's gate singing, hovers
morning-bright to Thee,

Throws still the dark blood back and forth

In the avenues where the bat hangs sleeping, upside-down

And to me undeniable, Jesus.²²⁾

雲雀は神へ向かう気持ちの象徴で、私マタイは神へ向かう無垢な気持ちがあると同時に、紛れもなく (undeniable)、「常にどす黒い血を前後に投げかける」(Throws still the dark blood back and forth) のだという。これは上の方で神から脱却して地上へ降りてきた、普通の人間としてのマタイの姿である。この二つの方向は次にも見られる。

Listen, Paraclete.

I can no more deny the bat-wings of my fathom-flickering spirit
of darkness

Than the wings of the Morning and Thee, Thou Glorified.²³⁾

ここで再び、この詩の最初に高らかに歌われた人間宣言が繰り返され、確認される。そしてイエスが『ヨハネによる福音書』の中で述べた言葉に対して、ロレンスが感じた「無責任」だという考えが我われに分かってくるのである。天上へ引き寄せた人間は時が来れば解き放たれねばならないと、次のように歌う。

I am Matthew, the Man:

It is understood.

And Thou are Jesus, Son of Man

Drawing all men unto Thee, but bound to release them when the hour
strikes.

I have been, and I have returned.

I have mounted up on the wings of the morning, and I have
dredged down to the zenith's reversal.

Which is my way, being man.

Gods may stay in mid-heaven, the Son of Man has climbed
to the Whitsun zenith,

But I, Matthew, being a man

Am a traveller back and forth.

So be it.²⁴⁾

最後にマタイの人間としての道が述べられる。ここでは神と俗人とははっきりと区別され、人の子は聖霊降臨祭に天頂へと昇り (the Son of Man has

climbed to the Whitsun zenith)、そのまま中空に留まることができる (may stay in mid-heaven) のに対して、人間マタイの生きる道とは、天国に行き来する旅人 (a traveller back and forth) だというのである。最後の So be it. は「アーメン」と訳されるが、文字通り考えれば「かくあらせ給え」となり、マタイの神への敬虔な気持ちがよく表れている。

IV

ロレンスは特に晩年にはキリスト教の在り方に批判的となったが、以上のように彼のマタイの表現の中に、キリスト教に対する批判にいたるまでに、このようにアンビバレントなものがあり、彼のキリスト教観が決して一枚岩でなかったことが分かる。

またこの詩の中に見られる世界は、中世の天と地だけの天動説で自己完結するものではなく、我われが生きている地球が宇宙に無数に存在する星の一つに過ぎず、神と人間はそれらの大宇宙に位置していて、それぞれは従来の宗教のように上下関係ではなく、互いに他を支配せず独立しながら生を全うすることを理想としているという、21世紀が進もうとする未来に通じる壮大な考えが見られる。これは日本で言えば宮沢賢治の宇宙観にも似たアニミズム的なものであり、その意味で今後の21世紀を先取りするもののように思われる。この考えはロレンスの小説の中にも見られ、先に述べたように『恋する女たち』の中でアーシュラが述べた「星と星との均衡」という言葉の中に、キリスト教など、従来の伝統は言うに及ばず、地球そのものをも超越して新しい宇宙に雄飛する大宇宙を感じとることができる。

ロレンスは近代が追い求めてきた未来の永遠の中には理想を見いだすことができず、過去の永遠の中にそれを探し求めながら、その中からこのように近代を迂回もしくは超越して、21世紀が向かう未来にふさわしいものを発見しようとしたのである。

注

- (1) Preston, P. A *D.H.Lawrence Chronology*. St.Martin's Press. 1994. p.102,106.

- (2) Ad de Vries. *Dictionary of Symbol and Imagery*. Trans. S. Yamashita and others. Taishukan, 1984. pp. 629-30.
- (3),(4),(5),(6),(7),(8),(9) D. H. Lawrence. *The Complete Poems of D. H. Lawrence, I*. eds. Vivan de Sola Pinto and Warren Roberts. London: Heinemann, 1972. p. 320.
- (10),(11),(12) *Ibid.*, p. 321.
- (13) *Ibid.*, pp. 321-22.
- (14),(15) *Ibid.*, p. 322.
- (16),(17) *Ibid.*, p. 319.
- (18) Lockwood, M. J. *A Study of the Poems of D.H.Lawrence*. Palgrave, 1987. p. 117.
- (19) cf. *Women in Love*. eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen. Cambridge: Cambridge U. P., 1987. p.148.
- (20),(21),(22) *The Complete Poems. op.cit.* p. 322.
- (23),(24) *Ibid.*, p. 323.